

ポケット ジャーナル



★講師は一流クリエイター
デザイン界・写真界の一
流クリエイターが講師を務
める「神戸クリエイティブ
フォーラム'93」が開催され
る。従来の一方通行型の講
座とは異なるコミュニケーション
重視のセミナー。実
際のアドバイザーが受けら
れる。

◇講師

10月16日(土) 柴田敏雄・立木義浩
10月23日(土) 内田繁・菊竹清訓
10月30日(土) 佐藤晃一・田中一光
11月6日(土) 浅葉克己・タナカノ
リュキ

11月13日(土) 奥村毅正・山本容子
11月20日(土) 坂井直樹・松岡正剛
11月27日(土) 川上元美・松永真
◇時間 午前0時〜午後5時

◇受講料 各講座38000円

◇定員 各30人

◇会場 神戸ハーバーランドニユー
オータニ

■問い合わせ 神サクレ

☎078-366-2220

★「ボールマシン」愛称募集
ボールの永久運動的な動
きのおもしろさが人気の神
戸ハーバーランド・キャナ

ルガーデン内設置のモニユ
メント、通称「ボールマシ
ン」を、市民の方により一
層親しんでいただこうと、
キャナルガーデンオーブン
1周年記念の一環として愛
称が一般募集される。



◇応募方法 キャナルガーデン「ボ
ールマシン」横設置の応募コナ
ーの投票。または官製ハガキに愛
称、住所、氏名を記入の上郵送(何
通でも可)。ただしハガキ一枚に愛称
1点のご記入

◇募集期間 10月31日(日)まで(当
日消印有効)

■問い合わせ 郵送先 D.N.建物管
理株式会社 〒650 神戸市中央区川崎
町1-7-4 タイヤモンドニッセ
イビル7F

☎078-360-15050

★第7回'93メリケン地蔵盆
ちびっ子達と精霊流し
メリケンパーク東入口に
あるメリケン地蔵の、第7

回'93地蔵盆が、神戸港を考
える会(鉄尾三郎代表)メ
リケン地蔵奉賛会(角本稔
代表)の主催で、8月22日
の午後6時より開かれた。



ちびっ子達によるバレエ

今年も、大竜寺の井上仁
壮師が、海で亡くなった人
々の慰霊と、港の繁栄を願
って法要。プログラムは、
初参加の今岡頌子舞踊団の
チビッ子バレエ。まり遙さ
んのシャンソン、ブアラニ
・サヨコさんのフラダンス、
河野電子さん指導の盆踊り
と盛りあがった後、精霊造
りのコンクールに続いて、
海へ流す精霊流しを子供た
ちと共にを行った。波にゆれ
る灯に心が洗われる夕べだ
った。

★青い空見よう! 全日本
紙飛行機選手権大会

手作りの紙飛行機を飛ば
して滞空時間を競う「第一
回ジャパンカップ全日本紙
飛行機選手権」の予選が8
月から10月にかけて各地域
で行われている。兵庫県で

★誕生日ありがとう運動



私の出会った宝子たち(9)

「かまいやさん」のKさん

「かまいやさん」と呼ばれている

Kさんは、学園内を取り仕切る

参謀的存在です。

わからないことはKさんに聞け

ば何でも知っている情報通でも知

られています。が、時々間違った

情報を流してくれるので困ること

もあります。

就職できる能力は十分持ってい

ますが、家族の人の希望もあり実

習という形で、午前中だけ仕事に

でかかっています。

お金の管理もきっちりでき、実

習で頂くお給料は貯金し、こづか

い帳もつけています。

とても神経が細やかで、かゆい

ところに手が届くように気配りが

できます。

特に重度の人の介助は、保護者

の人も安心して任せられる程信頼

を得ています。

唯、一つの欠点である「かまい

やさん」は、よく気がつきすぎ

て、先、先、手助けしてしま

うことです。

でもKさん、あなたから教わる

ことは、いっぱいあります。

これからお返通し、「かまい

やさん」と言われ続けても、マイ

ペースで進んでいきます。(N)

誕生日ありがとう運動本部

〒650 神戸市中央区御幸通8-1-1

神戸国際会館一階郵便局の隣

TEL・FAX

078-2331-2114



(左から) 松井さん、宇津さん、金本さん

★北野をつくる人々の
ポトレイト写真集発刊
世界各国の人が住む北野。今そこで、その発展に関わる人々を紹介したポトレイト写真集「北野クロニクル1993」の発刊準備が進められている。

発刊人は、ご自身も北野で仕事を展開している宇津誠二さん。「開港以来百数十年の間に異文化、異宗教

は六甲アイランドサンバーン広場に3回に分けて行われた。糸ゴムを用いて飛ばすゴムカタパルト部門と、手投げ部門、どちらとも本格的に参加者は真剣そのもの。デザイン競技は10月15日まで日本紙飛行機協会大阪事務局まで必着のこと。また滞空競技の決勝大会は11月21日、吹田市の万博記念公園で行われる。

■問い合わせ 日本紙飛行機協会
大阪事務局 電話06-304-8273

をバランスよく受け入れてきた北野の姿と包容力を理解してほしい。それが活性化につながるれば」と発刊意義を語っている。

読者対象は市広く、地元神戸の人はもちろん、旅行や商用で訪れた人など。発刊は11月下旬(予定)。北野の店舗や案内所内での販売のほか、通信販売も予定されている。



ミスタイガースも

★ミスタイガースが
献血呼びかけ
神戸三宮ライオンズクラブ主催の、恒例秋の大献血運動が9月28日、大丸山側で行なわれた。

私設応援団およびミスタイガースによる献血パレードが、商店街をねり歩いた。秋晴れの平日、仕事途中のサラリーマン、買物婦りの主婦が約980名参加した。

■今後の献血運動予定
◇日時 10月20日(水)、11月18日(木)、12月15日(水)、平成6年1月20日(木)、2月17日(木) 午前9時30分〜午後4時
◇場所 JR三ノ宮駅南側



あなたも献血にいかが

★長田悠希 普賢を歌う

デビニュー以来六年余、関西を基盤に活躍中の若手歌手長田悠希の新曲「普賢花」「島原慕情」が今月21日に日本クラウンレコードより発売される。

雲仙普賢岳の火砕流で夫を失った未亡人が子供と共に逞しく生きていく姿と普賢に咲く花になぞらえた東隆明作詩の作品を、普賢岳災害に心を痛めていたという長田が渾身の力を振って歌っている。



各界の著名人が集まった

★新神戸オリエンタル劇場
5周年に集う

9月8日の夜。新神戸オリエンタル劇場が5周年を迎え、中内功会長が新神戸オリエンタルホテル真珠の間で記念祝賀会を開いた。

5周年記念の作品を劇化した藤本義一、ホテルと劇場内で推理パーティを開いた筒井康隆、ソング・オブ・サイゴンに出演する嵐を初め、布施明さんら多彩なメンバーが神戸文化発信基地の5周年を祝った。

★ドラマの予感、この秋か
10G Kiss-PM

開局3周年を迎えたKiss-PMがリニューアルオープンする。身近な情報を伝え、快適なBGMを流

す」だけのラジオ界全体の
体質を積極的に改善してい
こうと、「ドラマ」「感動」
をテーマに新しい番組作り
に取り組む。

神戸が舞台の切なく熱い
オリジナルラブストーリー
を毎日午後8時から9時の
1時間枠でオンエア。リス
ナーから寄せられる恋にま
つわる悩みやメッセージを
からめ、日本でたったひと
つ、ドラマのKiss—F
Mを打ち出す。また10月1
日にはハーバーランドのキ
ャナルガーデンにサテライ
トスタジオ「マリスタ」を

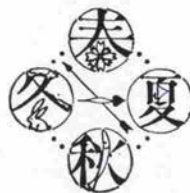
オープン。3番組をここか
ら発信する。ガラス越しに
生放送中のスタジオが見ら
れる、ハーバーランドの新
名所になりそうだ。

★日経レディスダイアリー
「カシア」をプレゼントノ

日本経済新聞では京阪神
のOLをメインターゲット
にしたレディスダイアリー
を作った。今回で5冊目。
毎回500人以上のアンケート
調査に基づき、機能的、デ
ザイン、情報量などが見直
されており、新聞社らしい
盛りだくさんの情報（京阪
神の情報を中心に）が特徴。

しようとしているのであ
る。開港して一番機が飛
ぶのは平成六年九月とい
うのである。神戸の地は
遙か対岸ということにな
るが、意外に近い距離に
位置する「大空港」なの
である。しかも、この空港
の最も特長的なことはま
ず、海上空港であるとい
うことである。従ってこ
の空港は一日、24時間離
発着できるという画期的
な空港である特色を持つ
素晴らしいことである。
恐らく神戸まで30分
到着できるという、願っ

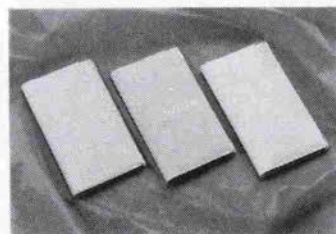
計 時 花



いかなる「大空港」に
育てるのか

大阪湾の泉南沖に、い
ま、着々と「関西国際空
港」のプロジェクトが進
行中である。いわば、現
在開港まであと一年とい
うところに来ている。ま
さに、世界のハブ空港を
目指す「大空港」が出現

先着100名様にプレゼントし
ます。



ページ、ブルー、ピンクの3色が揃う

■ご希望の方は11月1日以降に月
刊神戸子編集室まで直接お越し
くださいませ。
神戸市中央区東町113-1 大神ビル
9F 神戸市役所新庁舎西隣り
電話 331-2246

でもない立地の空港がで
きる。市民はもっと、こ
の空港について知識を持
つべきだと思う。

しかし、どうも情報が
ビビットに流れてこな
い。報道もあまりされ
ていない。内輪同志で合点
をしていても、それはお
かしい。世界に冠たる国
際空港である。周辺の市
民はもっと深い関心と、
強い連帯を持たねばなら
ない報道機関も大いに取
材発信をして貰いたい。
「大空港」のあり方は、市
民も責任がある。△Y△

◆ KOBE POST

★10月4日より「アーバンリゾー
トフェア神戸'93」の事務局が移転
ト51中央区雲井通5丁目1番1号
神戸市中央区総合庁舎9階321-
5996（代表）

★株式会社乾汽船の乾豊彦取締役
相談役・元日本ゴルフ協会会長が
9月20日肝不全のため昭和病院で
死去。海運業、ゴルフ、茶道など
幅広く活躍。現・日本ゴルフ協会
名誉会長。10月19日午後2時から
神戸ポートピアホテル大輪田の間
で社葬が行われる。

★琵琶演奏家の上原まりさんの事
務所が移転。例上原まり事務所
107東京都港区赤坂9-16-28-802
上原まり電話 03（3408）3733
0 FAX 03（3408）56336
★ルイ・ヴィトンジヤパン御神戸
（大倉昌子店長）が、10周年を迎
え、10月19日午後7時より、パ
リック・ルイ・ヴィトンを開むタ
ペを開催。

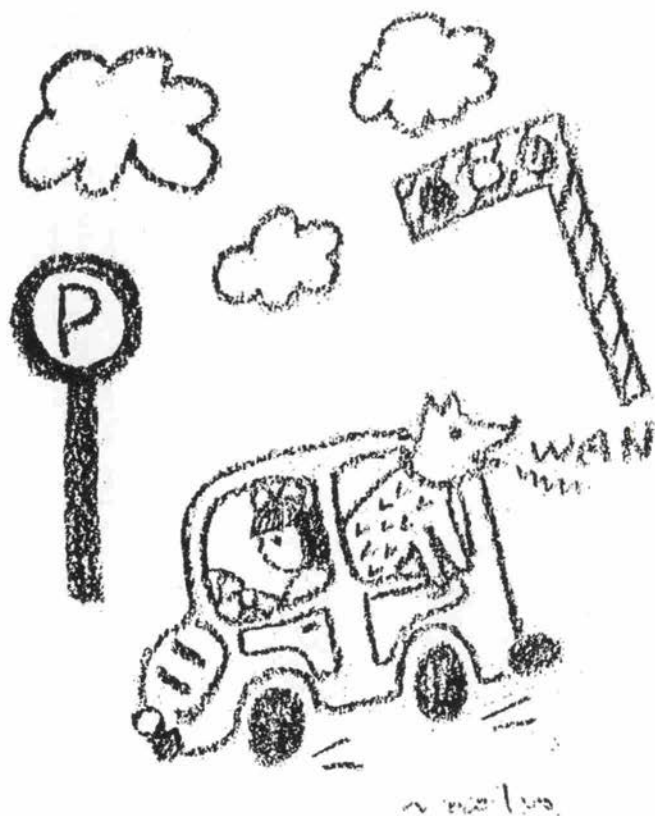
★学校法人須磨学園理事の足立淑
さん（故足立巻一氏夫人・77歳）
が、九月二十九日に世界された。
葬儀は三十日（木）の正午、花隈
の福徳寺で。ご冥福をお祈り致し
ます。

★第6回ルネッサンスの会'93作品
展が10月14日（木）19日（火）ギ
ャラリーはりかわで開催されます。
電話 332-4877

★第19回愛の手バザー（里親運動
をすすめるための）が、10月27日
（水）午前10時午後3時迄／神
戸市立個人会館4Fつばき・もく
れん・すみれ5Fさくらで開催。
（品物の提供は10月中旬迄）お問
合せ／家庭養護促進協会（中央区
橋通3丁目4-1総合福祉センタ
12F）（31）5046

★甲斐文化研究会の阪神間サミッ
ト（仮）A地域を越えた阪神間V
が、甲斐文化研究会、阪急沿線都
市研究会、共同研究（19930年
の阪神世界）の三つの研究会によ
るシンポジウム。11月3日研究会1
5時／甲子園会館

ビジネスに!
ショッピングに!
ご利用ください



磯上モータープール

- 収容台数 350台
- 月 極 駐 車 可
- 年 中 無 休

(神戸国際会館前) TEL (078) 251-2662 (8:00A.M.~11:00P.M.)

神戸の山里は民俗文化の宝庫

田辺 真人 ▲園田学園女子短期大学助教授▽写真／池田 年夫

港町神戸は、やはり「海」のイメージが強い。しかし、神戸の市域は約五五〇平方キロもあつて、例えば約二二平方キロの大阪市と比べても、二倍以上の広さを持っている。そこで、この広い市域の中には、六甲山地の南側の旧市街地のような海沿いの地域とは、違った世界もある。今回は神戸のいわば山里をたどってみたい。

神戸の中心三ノ宮は、新神戸トンネルを通る三〇分足らずのドライブで典型的な神戸の山里「北区山田町」に直結している。今回のルポではこの山田の里よりさらにもう一つ山を越えた北側を訪ねよう。

新神戸トンネルを通じて箕谷に出、山田川を下って衝原を過ぎると、吞吐ダムでできた人造湖の脇で車は神戸と三木との市境を越える。これがおおむね古来の摂津・播磨の国境線であつた。もう少し川を下ると、三木市御坂で山田川は北東から来る淡河川と合流し、ここから西は志染（しじみ）川と呼ばれる。『播磨国風土記』に履中天皇が来られた時にここで食事をされたところ、食事の箱に蜆貝が這い上つたので「シジミ」と名づけられたと記す古い地名である。

神戸市からは離れるが、志染川を少し下ると、谷筋がやや開け「大谷」と呼ばれる土地があり、川の北の丘陵地の奥に山伏の寺として知られる伽耶院がある。播磨・摂津の各地に多くの寺を創建したという伝説的な法道仙人が、大化元年に創建したという伽耶院は平安時代に堂



10月10日、伽耶院の境内には多くの山伏衆が集まる

宇數十僧坊百三十余と伝えられるほど繁栄したが、慶長一四年（一六〇九）羽柴秀吉の三木城攻撃に際して焼き打ちに合い衰退。江戸時代になって諸大名の援助で再建され、天和元年（一六八一）十月十日に後西天皇から伽耶院の号を賜った。これを記念して毎年十月十日に大護摩の供養が催される。近畿一円から参集した百人以上の山伏が繰り広げるこの行事は参加した人々に深い感銘を与える。さらびやかな衣装の修験者たちによる山伏問答

に始まり四方鎮め・大護摩によって境内一帯に立ちこめるミルク色の煙など、この日の体験で民俗学を志したという若者もいるほどである。

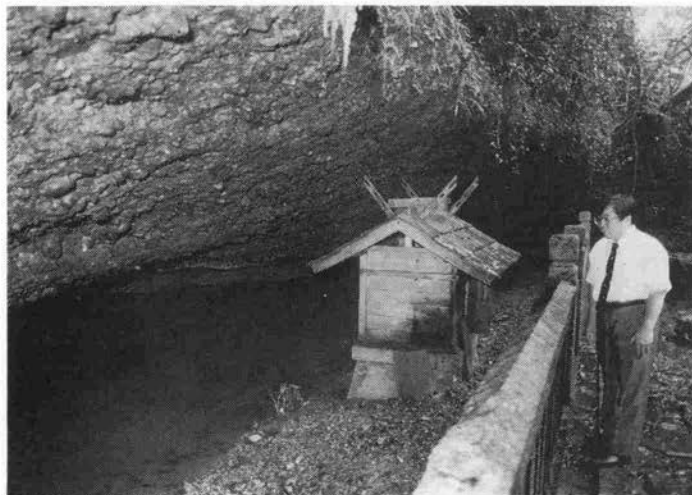
伽耶院からもとの志染川にもどって川を南に渡ると、道端に「ドッコイさん」と呼ばれる不思議な石像がある。大きな石の表面に六体の人形のような像と数十体の小さな人形が線彫りされている。考古学的には、そこにあった古墳の石室の石材に素朴に彫られた六地藏だろうと考えられているが、中にはUFOや宇宙人に結びつける人があるほどに、奇妙な石造遺品である。

ドッコイさんから一キロも東に歩くと、なだらかな丘陵の麓の窪地に「志染の石窟（しじみのいわや）」がある。これも『播磨国風土記』や『古事記』に記される古い洞穴である。記紀によると皇位継承の争いで第二一代

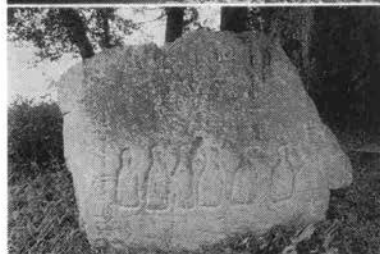
雄略天皇に父親・市辺の皇子を殺された億計（おけ）皇子と弘計（をけ）皇子は大和から志染の地に逃れ、この岩屋に隠生して、忍海部（おしうみべ）の細目（いとめ）という土地の豪族のところに仕えていたという。後に身分が明らかになるが、その時すでに雄略は亡く、時の二

二代清寧天皇には跡継ぎが無かったため、大和に招き返されて二三代額宗（弘計）二四代仁賢（億計）天皇となったという。神戸市西区の押部谷や三木市志染の細目など中央の記録に符合する地名が近在にあり、この二皇子淹留の説話は極めて興味深い。皇子が隠生したという志染の石窟はいっしょに訪ねても常ならぬ雰囲気である。白煙流れる伽耶院の境内・奇妙なドッコイさんの彫刻・静まり返る洞穴のたたずまいなど、神戸市域を一步離れた東播磨の一面に、不思議な気配の漂う志染大谷の里である。

ここからUターンして川をさかのぼると、先程通った山田川と淡河川の合流点に鎮座するのが御坂神社で、平安時代の延喜式に載る古社である。境内には文化四年（一八〇七）再建という棟札を持つ能舞台がある。全国の農山漁村に分布する農村舞台は、村の鎮守の境内に建られた庶民の芸能の場で、兵庫県は全国的に知られる農村舞台の分布する県だ。神戸市北区の山田町などはかつて一三の村々に合計一四棟の歌舞伎舞台があったほどである。このように一般的には農村部には歌舞伎の舞台が分布す



岩屋金水としても知られる志染の岩屋線彫りの不思議なドッコイさん
文化4年の御坂神社能舞台の棟札





石峯寺の三重の塔は室町時代の建築で国指定の重要文化財

るのだが、加古川と明石川の流域を中心として、県内には能舞台の大きな分布圏が認められる。御坂神社の舞台もこのような点から民俗芸能研究の上で注目される。

御坂から今度は山田川と別れて、淡河川をさかのぼろう。淡河は、神戸の市街から北の六甲山地を越えた山田から、もうひとつ北の丹生・帝釈山系を越えた山間の地である。

小さな盆地状の淡河は、伝説によると、太古ひとつの湖であったという。宝亀十一年（七八〇）湖畔に住んでいた国次左衛門が、下流の堤になっていたところを切り、湖水を流しさつたために湖底が現れて盆地になったのだという。水が退いた後人々はかつて湖で最も深かった二か所に新たな大地の鎮守——八幡神社と歳田神社——を祭ったという。この淡河勝尾の八幡神社では、毎年二月一七日の「お弓の神事」がある。これは年の初めに悪鬼退散を願う行事で、鳥居の下に「鬼」と書いたのを置き四名の氏子が矢を放つ。厳格な作法は古態をとどめており、県の無形民俗文化財に指定されている。一方八月一六日の夜この神社の境内では、かつては広く播磨を風靡した播州音頭による盆踊りが今でも素朴に続けられている。

興味深い民俗芸能の勝尾八幡神

社を後に川をさかのぼれば、淡河の中心・淡河本町。その南西の丘陵は淡河城跡で、今でも天守台址や堀が遺っている。鎌倉時代から戦国時代までの城主・淡河氏は、三木城攻撃の羽柴秀吉によって、天正七年（一五七九）に滅ぼされ、淡河城下は秀吉の支配を受けた後、有馬氏に与えられ、慶長六年（一六〇一）有馬氏が三田城に移るまで一時は有馬氏の美濃郡支配の本拠として一六世紀末全盛期を迎えた。その後、淡河城は江戸幕府の一国一城令によって廃され淡河は静かな農村となったわけである。淡河川をさらにさかのぼると、東畑の村はすれに景勝・曇（くもり）が滝がある。穏やかな淡河川随一のこの滝は古くから霊場として信仰を集め、滝壺には、黄金の蟹



勝尾八幡神社のお弓の行事



御坂神社の能舞台

やガタロがいると伝えられてきた。大昔、天竺から法道仙人が仏教を広めようとして、紫の雲に乗り龍や鬼神に囲まれて日本に飛来し、淡河の上を通りかかって、この滝を訪ねた。この時、仙人は「曇り滝おきつ白浪白砂の丹生山（にうやま）めぐる水は泡河」という歌を作って、滝の横の岩壁に刻んだという。滝を見下ろす岩場の上に祀られている龍宮大神と不動明王や、法道仙人にまつわる伝説などからして、この滝は民間信仰の行場で、曇が滝という名も元来は「龍もり」が滝であったかと思われる。

この法道仙人によって、白雉二年（六五一）に開かれたとする淡河の名刹が岩嶺山石峯寺で、全盛期の鎌倉時代には四七の塔頭・支院を数えたという。国の重要文化財である薬師堂や三重の塔のほか石峯寺には多くの文化財がある。

北僧尾の農村歌舞伎舞台も淡河の重要な文化遺産である。これは、柱に残る墨書から安永六年（一七七七）の建立と現存する年代のわかる、日本最古の農村歌舞伎舞台なのである。

このように文化財の多い淡河の谷をさかのぼって東に峠を越えると、神戸市で最も北東、八多・大沢・長尾の一角。今日の最後の文化遺産として、日西原にある瀬上家住宅を訪ねたい。室町時代、播州の赤松氏の家臣であったが、主家と共に嘉吉の変に荷担して幕府から追われる



瀬上家の住宅に残る古いおクドウさん

こととなり、この地に隠生した二階正友が同家の祖だと伝えている。やがて日西原村の庄屋となり、一時は近在の大庄屋を勤めて三田藩主から今の姓を与えられたという淵上家には、慶長一八年（一六一三）の検地帳以下八〇一点の古文書が保存されている。その住宅は、文化三、四年（一八〇六、七）ころの建築と伝える豪壮な屋敷で、本年の神戸建築百選の特別賞を獲得した。

新しい観光地フルーツ・フラワ―・パークのすぐ近くに、対照的な近世の民家建築を訪ねて、神戸の山里探訪の旅を終えたが、六甲山地のはるか北方の市域に遺る豊かな民俗文化財に感嘆する一日であった。



神戸建築百選『特別賞』に選ばれた淵上住宅の前で 淵上御夫妻と筆者



淵上邸は美しい石垣に支えられている

一大事

平井 彩花
絵／大橋 良三

（その五）

中村忠介は、その夜も、かなり遅くに帰宅した。

忠介は役目でも無い事でも頼まれれば引受け、手隙の時には同僚と一献傾け、運が良ければ上役の御相伴をすることもあって、この頃では早くに帰宅する事の方が稀であった。そういった事が、今日の自分の地位を支えているのだと思っているのに、別にそれが苦になる事もなかったし、むしろ早く帰宅した時は、何か手持ち無沙汰で忘れ物をしたような心地になって落ち着かない。

今日は、帰りにまたバツタリと奉行の下山と出会って、たいそう珍しい事に相伴にあずかり、その上、下山はひどく機嫌が良いらしく、話の合間に中村の評判が良く役が上がりそうな事を漏らしてくれた。

小躍りせんばかりの忠介は初め、妻が気鬱そうにしてゐるのに気が付かなかった。

着替えの終わったのを見すまして、妻が声を潜めて、女手一つで壮之助ら子供を育てている忠介の妹が来ている事を告げた。すぐには何の用事か思い浮かばない。しかしかなり夜も更けているのに待っていると言う。

「何の用事が全然言わないのか。」妻女は首を振った。
「遅くなっていますし、わたくしから、きつと伝えます」

からと言っても何もおっしゃらないのです。ただ、重大な事かもしれない、とだけしか。」と不満そうに言う。
（かも）と言う言葉が引っ掛かる。

忠介も嫌なものを感じながら別室で待っている妹の前に座った。

（その六）

昼前の埃っぽい道を、中村忠介は馬に乗って歩んでいた。影は短く陽を遮るものは何も無く、馬も嫌であるらしく、また馬上の人間の気の重いのも読んで歩みが鈍い。

昨晩、妹が語るところによると、息子の壮之介が常より早めに帰ってきた。それだけなら、あの怠け者めと言うだけで済むのだが、衣服に返り血らしい物が付き、刀も曇っているようなので問い詰めたが、何でもないと言うばかりだと言う。

急ぎ壮之助を連れてこさせ、忠介自身が、思い当る事の無いと言うのをさらに問い詰めると、里で童を一人切ったと言う。

疎い地理を思い巡らして御池村の事と当たりをつけ、夜が明ければすぐに、地の縁の無い者でもあり、とりあえず村の長の家へと駆け付けようとしたのだが、何とも



気が重く出遅れてしまい、日も高くなってしまった。
途切れることなく流れる汗を拭いながら、生まれ育つた東国とは随分と異なる西国の夏の厳しさを呪った。

この盆地は、夏暑く冬は寒い。気候が違うように、人の情も随分と異なるようなと思いつ返していた。

ひやらひやらと祭り囃子にも似た柔らかな物言いの底に刺を隠してと、言葉は荒くとも純朴な東国の者とは思えない違いだと、在の者と接する同輩は常にこぼしている。

ふむ、それはあるなど、これから立ち向かう事態への心構えとして忠介は少しく考え込んだ。

ここの者は京・大坂の背後に控え、常に戦乱を屏風一つ隔てて見てきた。それ故、心は否であつても、口先では是と言いながら暮らして来たのだらう、一筋縄ではいかぬような、心せねばと気を引き締める。
が何やらしきりと、自分が見落としていた事のあるような気がして落ち着かなかった。

ここは御公儀も目を光らせている京・大坂も近く、それでなくとも伊賀・甲賀が近く、何か騒動が起きれば筒抜けじや。もつと些細な事で騒動の起きたこともあるし、もつと些細な事で取り潰された御家もある。

昨夜の昇進話が、うたかたのように消えて行く。我が

身ばかりか命に変えても大事な御家がとの思いに、何と
しても穩便に納めなくてはなるまいと強く思った。

がそれにしても、親戚に嫁いだものの義弟が早くに亡
くなって、近頃は倫だの義理だの喧しく、二夫にまみえ
ずだとかで再縁もままならず、女手一つで子供を育てる
妹を不憫と、甥達に目に掛けたのが裏目に出たと忌ま忌
ましかった。

いやそれよりも、もっと我が身に差し迫った事とし
て、畿内は地侍等、百姓とも武士ともつかぬ者が多く、
その時々で形を変えて働くと聞く。

この辺の者も皆そうで、闇夜のカラスの如く、侍とも
百姓とも分からぬそうだ。

いくら刀狩りだと武器を取り上げようとしても、地に
生える雑草のごとく、しぶとく地中にくらい込み、抜こ
うとしても上辺だけで、しばらくするとまた盛り返して
くる、と生い茂った夏草をうんざりと見やりながら忠介
は思った。

ふと遠くの田畑で野良仕事をしている村人がこちらを
見ているような気がした。その視線が尋常で無いものの
ような気がして背筋をうすら寒いものがすべり落ちた。
誰かが走って行くのが見えるような気がした。戦場な
らさしずめ斥候だなどと思った途端、昨夜から眠りを浅く
していた不安が、形になり始めた。

地侍達は、伊賀・甲賀と言った程で無いにしても、尋
常でない兵法を持つ者が多い。昨日の今日で、身内の者
を殺された者が待ち構えていたら……。

丈高く生い茂った夏草のかたまりの陰に、人がいそう
な気がする。

僅かな風に翻る葉裏の白さが突きを入れてくる槍の穂
先、飛虫の羽音が矢羽根のうなりのような気がした。

しかも腰には、いつものように竹光をさしていること
に、突然気が付いた。

これでは立ち向かい様もない。問答無用と殺されて、
何処かに密かに葬られれば、自分など捜しようも無いだ

ろう。藩も突然行方知れずになった者など、不埒な奴と
されるのがおちだと思えた。

灼熱の太陽の下で背中が異様に冷たく、氷の板を背負
っているようだ。

村中に入っても、あちらこちらから刺すような視線が
感じられ、長の屋敷についた時には、疲れ果てて立って
いるのがやっとの忠介だった。

村の長の屋敷は、まだ普請したばかりの忠介の屋敷な
ぞ比べようもない程がっしりとした造作で、通された座
敷から見える庭の木も、辺りを満たす蟬時雨を振り撒き
ながら、この地に生えた年月を物語って大きく太い。

忠介は事あれば砦ともなりそうなとまたぎくりとす
る。

薄暗い室内に眼が慣れてきた。床の間も何やら結構な
物が飾られているが、何よりも、鴨居にはいわく有り気
な槍が飾つてあるのに、目が放せなかった。

心なしが線香の匂いが強すぎるような気がする。ひょ
っとするとこの家の子か。そう言えば、この家は名字帯
刀を許されていたと、またしても自分の腰の物の軽さが
悔やまれた。

仁右衛門は早朝に松吉を葬り、やれやれと寝入った途
端、御役人が来ると村人の知らせで、たたき起された。

顔を洗いながら、別の所へ行くものでありますように
と念じたのも空しく、次は門前に立っていると家人が知
らせてくる。

丁重に奥座敷に通すようにと言いつけて、こちらにも羽
織袴に改めてと、出させた衣服をまとうとするが、ま
るで手が別物になったかのように着替えるのに手間取
る。女房が呆れて子供にするように着せてくれた。

仁右衛門の奥座敷の所まで歩む足は震え、こんな事では
かえって痛く無い腹まで探られると、座敷の前で大き
く息をしたものの、自分の胸の音を聞きながら侍の前に
座った。

小柄で痩せた侍は、年寄りなのか若いのかよく分らない。

出された茶にも手を付けず、じっと何かを見ている。

その視線を追って、鴨居の槍を見ていることに気が付いた仁右衛門は小さく声を挙げてしまった。

名字帯刀を許されて、先祖伝来使っている名字は今更とおおっぴらに使っているが、刀は今時わざわざとして歩く者はいない。まして槍なんぞ、こんな所に掛けて置くのではなかった、何と申し聞きましょうかと、挨拶の言葉もしどろもどろであった。

この家の主で米山仁右衛門と名乗った大きな男の前で、中村忠介は膝の上の手の震えを必死で押さえていた。相手は忠介なんぞ、押し潰してしまいうような程、大きく見える。

なんとか時候の挨拶をしたものの、相手が何と返事したのかも、覚えていない有様で後が続かない。

襖の後ろで人の気配がするようでもあり、いつ切り込んで来るかと、冷汗の途切れる間も無い。

一体何をどうしていたかも定かでない、悪夢の中にいるような心持ちで半刻も過ごした頃、突然、寺の鐘が正午を告げて、ごとと鳴ったのに驚いて、文字通り飛び上ったのを、相手は帰る気配と見て送ろうとする。その時になって、肝心の事を言いそびれているのに気が付き、忠介はかすれた声で言い始めた。

「実は、拙者の甥の壮之助という者が、この辺りで童を一人……。実に短慮の者にて……」

舌が喉に張り付くようで声が出ない。が仁右衛門は確かにうむと深く頷いたように見えた。家人も近づいて来て、見送ろうとする。そのまま玄関先まで出てしまつて、せめても万感の思いを込めて一札をした。後を恐れるかのように、馬にしがみつき振り返りもせずに馬を走らせ、ようようの思いで帰り着き、余りの顔色の悪さに驚く妻に、暑気当たりだと苦しい言い訳をして、床に横に

なつてしまった。

うまくいったかどうか気にはなるが、仁右衛門の領いたのを頼みに、うまくいったのだと、強いて自分に思い込ませようとした。

仁右衛門は皆が集まり、物騒な事を言っていたのを、咎められるのかと、何と言いつつと、生きた心地もなく、中村忠介と名乗る侍の前に座っていた。

相手は、侍らしく寡黙で、仁右衛門もそれが習性となつて寡黙であつたから、ただ、しんと向かい合っているのみであつた。

それだけに相手が帰る間際に漏らした言葉は意外すぎる程で有り、腰が抜けるほど安堵した。女房が口やかましくあれこれ聞いてくるが、話してやる事が元々少なく、その不満そうな視線から逃れるように、自分から用事を言い出して野良に出た。

